

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370781

研究課題名(和文) 日本における古代・中世移行期村落の構造と展開

研究課題名(英文) Structure and development of ancient and medieval transitional villages in Japan

研究代表者

坂上 康俊 (Sakaue, Yasutoshi)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：30162275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：古代集落は、全国的に9～10世紀に崩壊したとされているが、福岡市域を事例として精査すると、9世紀には治水がうまく機能していないことが看取される。確かに集落の数は減っているが、一方で散在的に存続している集落も見いだせ、集落が外側・周辺部に展開しているようである。こういった現象を総合的に見れば、条里水田面から谷戸に生産基盤が移動したという仮説が成立するだろう。いわば、中世的景観の端緒である。つまり、旧秩序の崩壊 公共事業(灌漑・復旧)の壊滅 谷戸田から始まる中世的景観(大中河川からの灌漑による条里水田面の放棄、小河川から門田に引水)と推移したのではなかろうか。

研究成果の概要(英文)：Japanese ancient settlements are said to have collapsed nationwide in the 9th to 10th centuries, but when we look at the Fukuoka city area as a case, it is noticed that the flood control did not function properly in the 9th century. Indeed the number of villages is decreasing, but on the other hand, it is also possible to find villages that are scatteredly surviving, and it seems that villages are developing in the outer and peripheral areas. If we look at these phenomena comprehensively, the hypothesis that the production base has moved from Jori paddy face to Yato will be established. It is, so to speak, the beginning of the medieval landscape. In other words, the collapse of the old order the destruction of public works (irrigation, restoration) the medieval landscape starting from the valley paddy face (abandonment of the rice paddy field due to irrigation from big river, drainage from the small river to Kadota) .

研究分野：奈良平安時代史

キーワード：日本古代集落 日本中世村落 集落立地 水利

1. 研究開始当初の背景

1980年代半ばまで、古代集落の叙述は10世紀ころまでで終わっていた。しかしその後、上越・東北などの新幹線、関越・九州縦貫などの高速道路、工業団地などの大規模な開発に伴う広大な遺跡の発掘調査の進展を通じて、古代の集落のイメージ、特に継続性について注目が集まってきた。初期の代表的な研究として、畿内を対象とした広瀬和雄や、東国を対象とした阿部義平、さらには北陸を扱った宇野隆夫によるものが挙げられよう。これらを受けた形で、坂井秀弥が、主として東日本の集落を対象に、8世紀以来台地上に展開していた集落が10世紀に衰退することを強く打ち出している。西国については、必ずしも研究が盛んとは言えないが、小田和利が先鞭をつけ、山村信榮、菅波正人らによって、北部九州の古代集落の様相の研究は進められつつある。

2. 研究の目的

これらの研究では、どちらかと言えば律令制の成立と崩壊とが集落の盛衰と一致するという坂井の東日本モデルが目立つように感じられ、小田の研究も西国でこれと一致するかのようにとられるが、実際には広瀬や菅波の研究に見られるように、畿内や西国では律令制の成立以前に安定した集落が誕生し、しかしながら9世紀になると不安定化、ないし衰退することが判明していると言える。

更に最近には、北東北地方の集落遺跡の集成を通じて同地方の10世紀中葉の一時期を除く10世紀末までの人口増加や集落立地の変化が指摘され、また、長野市の南宮遺跡のように9世紀後半に始まりながら10世紀半ばからの100年間には常時100軒程度の堅穴住居が営まれ、11世紀後半になって忽然と消える集落も見いだされるなど、全国を一律に説明するには無理があり、調査事例の一層の集積をまって、地域による特性や類型化を試みなければならない段階になっていると

考えた。

3. 研究の方法

報告者は、福岡市教育委員会が実施した発掘調査報告書千数百冊から、弥生時代以来の集落の動態・変遷・消長の状況を調査した。その結果、確かに9世紀、中でも前半の内に消えていく集落が多いことが分かった。問題は、福岡市域の報告書を通覧して指摘できる集落の衰退と見える現象をどう捉えたら良いかということであろう。

仮に、実際に衰退したと考えるならば、以下の原因が考えられる。

(1)自然災害や疫病などにより、その集落が衰退・消滅したという考え方。ただしこの場合でも、災害の規模次第では、回復力の減退を問うことが可能かと思う。

(2)その集落は衰退したが、人間集団は移住して別のところに集落を営んだという考え方。ただ、なぜ移動しなければならなかったのか、どこへ移動したのかを問う必要がある。

(3)律令制が維持してきた公的機能（灌漑事業などへの組織的動員、出挙による再生産維持、土地所有や水利などでの利害調整、その他）の衰退・消滅が原因で、維持しきれなくなったという考え方。ただし、福岡市域の場合、時期的にみて律令制以前に安定した集落が始まっていることとの関係をどう考えるか説明が必要であろう。

(4)在地首長制、ないし村落首長制の動揺・崩壊が、律令制的諸機能の崩壊を導き、集落が崩壊したという考え方。ただし、有力農民層は村落の支配層として継続していたとみる見方もあり、また、実際の生産関係において、どの程度首長層の統率・再生産システムが機能していたのかは、それ自体大きな課題である。

一方、本当に衰退したのではなく、見かけただけだという解釈としては、以下のようなものがある。

(5)居住形態の変化,特に竪穴住居から掘立柱住居に変わり,切り合い関係の検出や時期比定が困難になったという考え方。ただ,土層の中に土器類等の生活痕が残されていれば検出できるし,井戸その他の生活痕で継続性は検証できる。現に中世の集落の消長は,この方法で検証されている。従って,この説明は成り立たないであろう。

(6)同じ理由で,沖積地での居住が可能となり,耕地,特に水田の近くに移動したという考え方。ただし,もともと東国の古代集落は低地に営まれており,律令制の展開とともに台地上にのぼった経緯があるので,この説明にはやや難がある。築堤技術が進歩するという可能性は無きにあらざだが。

(7)土器から木器主体になり,検出も編年も難しくなった結果,集落の推移を描きにくくなったという考え方。ただし,生活用の土器の生産体制の崩壊が契機とすれば,やはり需給体制の変容を見るべきであり,これは社会の変容を示すことになるのではないか。

(8)(上の(2)と同じ)その集落は衰退したが,人間集団は移住して別のところに集落を営んだという考え方。なぜ移動しなければならなかったのか,どこへ移動したのかを問う必要がある。

4. 研究成果

以上のような遺跡の検証と推論とによれば,現時点では,やはり実際に福岡市内の集落は9世紀に入る頃に衰退したのであり,その背景としては,一般的に言うならば,律令制の基盤が崩壊し(階層分解,共同体・村落首長制の崩壊),公権力の形骸化,空洞化により,勸農機能が衰退,中規模以上の河川の管理が行き届かなくなるなど,防災・復旧態勢が脆弱化したことにあるのではないかと思う。しかし,もう少し具体的な原因を考えることは出来ないだろうか。

おそらくは,密接に関係する研究として,自然環境,特に気温と降水量の変化の研究,

或いは火山噴火(白頭山・十和田・開聞岳など)や地震等の影響の研究があり,また人口変動の研究がある。前者は集落の衰滅,あるいは移動の契機となり得るものであり,また飢饉・疫病の原因ともなる。後者は文献の記述と考古学との相互検証を可能とする。このほか,農業技術史・土木技術史等の知見で平安時代の村落景観の変動を説明できるかもしれない。

報告者は,これらの内,特に奈良・平安時代の人口変動を取り上げてみた。その結果奈良・平安時代には鋸の歯のように人口の増加と減少とを繰り返したのであり,大きな傾向としての増減を見いだすのは難しいが,9世紀に人口が大きく減少した可能性も否定できないとみた。

では,福岡市域を含む北部九州地域の人口動態は,文献的にはどのように言えるだろうか。ここで注目されるのが,弘仁・承和年間の風水害・飢饉・疫病である。弘仁年間のそれは,西別府元日によれば,推定67万人の当時の西海道の人口のうち,仮に死亡率を2割とすれば,1万町近くの死亡者口分田が生じることになるほどであり,公営田制施行の有力な契機と見なせるという。これは集落の衰退をもたらす大きな契機と見なしうる。

一方,集落遺跡そのものからは,もう少し異なる要因も見いだすことができる。サンプルとして取りあげた佐賀県唐津市中原遺跡2区の奈良時代の水田は,平安初期には厚さ約30cmのコモ層に覆われていた。連動するかのよう官衙的な遺物を出土した集落も衰退していく。また,福岡市の下月隈C遺跡(福岡空港敷地内)でも,9世紀前半に条里が施行されたが,その世紀の内に洪水で西半分が埋没,微高地化しており,微高地の上に集落は形成されたものの,生産の場は狭まったと言えることができる。

このように,9世紀には治水がうまく機能していないことが看取される。これとともに,福岡市域に関して言えば,河川流域の集落の

数は減っているものの、一方で周縁部には散在的に存続している集落も見いだせることに注目したい。ある意味では、集落が外側・周辺部に展開していると言うことが可能なのではなかろうか。

こういった現象を総合的に見れば、条里水田面から谷戸に生産の基盤が移動したのではないかという仮説が成立するように思う。いわば、中世的景観の端緒である。つまり、旧秩序の崩壊→公共事業（水利・灌漑・復旧）の壊滅→谷戸田から始まる中世的景観（大中河川からの灌漑による条里水田面の放棄、小河川から門田への導水による農耕）、と推移したのではなかろうか。現時点では、これが一番集落の分布と符合して、福岡市域に関しては説得的かと思う。

以上に述べた北部九州の様相は、その特殊性と普遍性とを慎重に勘案しなければならないとしても、古代集落の衰退という、全国的に9～10世紀に生じたように見える現象について、現時点での一つの見方として成り立つのではないかと考える。もちろん、集落の終末の状況について、具体的に個々の事例を精査する必要がある、これをまっぴらで初めて説得力のある説明をすることができるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

- ①坂上康俊, 阿恵遺跡と糟屋評, 粕屋町文化財調査報告書『阿恵遺跡』, 査読無, 2018, 125-129
- ②坂上康俊, 庚寅年銘鉄刀製作の背景, 福岡市埋蔵文化財調査報告書, 査読無, 第1355集, 2018, 1-8
- ③坂上康俊, 令（大宝令・養老令）, 佐藤信・小口雅史編『古代史料を読む 上 律令国家編』同成社, 査読無, 2018, 184-202
- ④坂上康俊, 筑紫館の風景, 佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館, 査読無, 2018,

248-269

- ⑤SAKLAUE Yasutoshi, Kristpher L. Reeves, *The Ritsuryo State*, Karl Friday ed. "Routledge Handbook of Premodern Japanese History", 査読無, 2017, 82-98
 - ⑥坂上康俊, 古代・中世移行期の村落—福岡市域を中心に—, 宮崎考古, 査読無, 27号, 2017, 1-4
 - ⑦坂上康俊, 『延喜式』書写の風景, 『九条家本延喜式四』月報, 査読無, 2015, 1-3
 - ⑧坂上康俊, 書評: 岡野誠「唐玄宗期の県令誠励二碑と公文書書式について」, 法制史研究, 査読有, 65, 2016, 242-244
 - ⑨坂上康俊, 対馬の防人と烽, アジア遊学, 査読無, 177, 2014, 17-27
 - ⑩坂上康俊, 律令制の形成, 『岩波講座 日本歴史 3』古代3, 岩波書店, 査読有, 2014, 3-34
 - ⑪坂上康俊, 神亀・天平の計帳よりみた戸口変動, 高倉洋彰編『東アジア古文化論攷 Part2』中国書店, 査読無, 2014, 355-364
 - ⑫坂上康俊, 嶋評戸口変動記録木簡をめぐる諸問題, 木簡研究, 査読有, 35号, 2013, 157-183
 - ⑬坂上康俊, 太宰府市国分松本遺跡出土木簡について, 考古学ジャーナル, 査読有, 649号, 2013, 14-17
 - ⑭坂上康俊, 奈良・平安時代は人口の激変期だった, 新発見! 週刊日本の歴史, 査読無, 16号, 2013, 20-21
 - ⑮坂上康俊, 書評: 服部一隆著『班田収授法の復原的研究』, 史学雑誌, 査読有, 122-11, 2013, 81-89
- 〔学会発表〕（計8件）
- ①坂上康俊, 古代末期における北部九州の集落の変貌, 台湾大学・九州大学人文学術交流会「人文学から見た東アジア」, 国立台湾大学文学院会議室, 2017
 - ②坂上康俊, 阿恵遺跡と糟屋評, いのちの旅 自然史・歴史博物館歴史講演会, 北九州市立

自然史・歴史博物館, 2017

③坂上康俊, 歴史学から見た福原長者原遺跡と豊前国, シンポジウム「豊前国府誕生—福原長者原遺跡とその時代」, コスメイト行橋文化ホール, 2017

④坂上康俊, 古代・中世移行期の村落—福岡市域を中心に—, 歴史学研究会例会, 早稲田大学戸山校舎, 2017

⑤坂上康俊, 古代・中世移行期の村落—福岡市域を中心に—, 平成 28 年度宮崎考古学研究会, 都城島津伝承館, 2016

⑥坂上康俊, 九州大学新キャンパスで出土した「庚寅年」銘鉄刀について, 東義大学校(大韓民国・釜山市) 学術講演会, 2015

⑦坂上康俊, コメント: 佐藤泰弘・小原嘉記報告について, 日本史研究会例会, 池坊短期大学, 2015

⑧坂上康俊, コメント: 李錦繡・佐川英治報告について, 第 59 回国際東方学者会議, 日本教育会館, 2014

〔図書〕(計 1 件)

坂上康俊『撰関政治と地方社会』吉川弘文館, 2015, 239

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂上 康俊 (SAKAUE, Yasutoshi)
九州大学大学院・人文科学研究院・教授
研究者番号: 30162275

(4) 研究協力者

竹井 良介 (TAKEI, Ryosuke)